

平成二十一年度「花のまわりみち」

定本 広文 選

川柳入選句

〔天地人・秀逸〕

「天位」

手を打てば枝震わせて花吹雪

山本 博とし

（評）風に吹かれて、桜の花が乱れ散る。それを花吹雪と言つて来た。桜にも寿命がある。この句は、上五の見付けが良くて、木に触れない思いやりが見える中七もよい。

「地位」

八重桜たまにはコイン咲かせてね

今井 ようこ

（評）大阪は通り抜けて、広島は、まわりみち。造幣局でもコインは広島で、貨幣セットも特売されることに気がついた。八重桜の花弁数と中七を重ねて、ユーモラスな句にした。

「人位」

わっと咲く桜がわっと手を広げ

増田 マスエ

（評）重ね表現は、一つのパターンであるが、何にでも使えるとは言えない。この句の場合、桜の咲き方をよく見ている作者だろう。特に下五の表現は、勢いも見えて同感。

「秀逸」(五句)

楊貴妃と並んで撮れば風騒ぐ

江川 美栄(美栄)

(評) ネーミングによって、花にも愛情がわいてくる。今年の花は楊貴妃だそ
うだ。品種の数が多いので親しみ持たれた為らしい。下五は、写真に撮
る様子を重ねている。

くんくんと香り楽しむ千里香

沖本 京子

(評) この桜は、今はまだ一本だそうだが、直感されたように香りが良いらし
い。香りをかく姿の表現は、子供も親も上五の言い方しか無いだろう。

これほどに観せてくれます回り道

津田 茂

(評) 敷地内のかなり広いスペースを、いろいろ工夫されているのは、行かれ
た人はご存じの通り。初めてでもなくても上五、中七は、一つの実感と
しての印象からだろう。

花の道詠めどもつきぬ句が溢れ

高田 和夫

(評) 何度か足を運ばれて、その都度、作句をされている人の実感だろう。風
の吹き方や天候によっても新しい発見があるはず。熱心さは下五の通り
かもしれない。

楊貴妃に負ける私はうば桜

山近 誠

(評) 「お世辞にも若いとは言えないが、年増ならば、かろつじて言える女性」
と辞書には書いてある。動ければ老人ではなく、元気な「年増」だ。対
比は大きいが、ユニークな句。

佳作

(二十五句)

風に乗り花ひとひらのお出迎え

大前 明子(明泉)

病む友の窓辺に届け花の風

河村 幸子

楊貴妃が今年の花と咲き誇り

三宅 宏美

散る桜残る桜も名前みる

川平 厚

花のみちどの顔もみなほころびる

村上 静代

頑張ってくれたんですね桜みち

外間 正枝

関山の身頃に数のカメラアイ

吉川 美佐子

妻ときて八重の苦勞もむくわれた

土屋 龍三

花の道妻は唱歌を口ずさみ

池田 喜代登

散り急ぐ桜の下に母をつれ

池田 英子

御衣黄の先達あつて花の道

西垣 武史

ちらちらと散りゆくさくら今みごろ

今朝丸 好江

楊貴妃にあやかりたいとコンパクト

勝山 君江(きみこ)

楊貴妃になったつもりで写真とる

三浦 節子

戦争を知らぬメディアとなる桜

吉川 徳子(徳子)

青空もピンクに染まる桜みち

羽城 敦子

関山と重さ比べだ普賢象

富田 花

楊貴妃も園児の声につれしそつ

川上 咲良

桜撮る姿を撮ってまた楽し

榊 敦子

シャッターに揺れる子どもとサクラの子

佐々木 紀香（のりか）

キレイだな桜とあたしい勝負

森川 あつみ

私より大きな顔の系括

田畠 実優

さくらみてはなしとえがをもちかえり

班石 孝美

かんざんはふくらみすぎてはじけそつ

永瀬 真彩

まわり道見渡すかぎり桜色

ふじおか ななこ

選者吟

定本 広文

生きているから桜との長はなし